

ダニエル書 - 第七十五番

預言における類似：イザヤの預言から現代の啓示まで

Jeff Pippenger

2024-02-08

イザヤが、六十五年をもって表されるメッセージ（第七章八節）をエルサレムの邪悪な指導者に告げるとき、彼は紀元前742年に「さらし職人の野」と「上の池の水道の端」でそれを行う。紀元前742年は1863年を表している。イエスはいつも初めによって終わりを示されるからである。1863年の反逆はさらに、アメリカ合衆国の「日曜法」を表している。イエスはいつも、物事の終わりをその始まりによって示されるからである。1863年は、法的に登録されたラオデキヤのアドベンチスト教会の始まりであり、その教会は日曜法という「大いなる地震」において荒廢のままにされる。教会が国家を支配するのではなく国家によって法的に統制されている法人が、その同じ政府が第七日の礼拝を法的に禁じる時に、どうして第七日の安息日を守り続けることができるだろうか。

キリストの公生涯の始めと終わりに、彼は神殿を清められた。最初の神殿清めにおいて、キリストは、指導者たちが「わたしの父の家」を強盗の巣にしてしまったことを明らかにされたが、最後の神殿清めにおいては、「彼らの家」が彼らのもとに荒れ果てたまま残されると示された。古代イスラエルは現代イスラエルを映し出している。彼はアドベンチズムの初めにミラー派の神殿を築き、清められたが、最後の清め、すなわち十四万四千人の清めにおいては、ラオデキヤ的アドベンチズムは彼の口から吐き出され、「彼らの家」はそのとき荒れ果てたままに残される。

イザヤは、布さらしの野のそばでアハズ王に対峙する。布さらしの野は、契約の使者が突然ご自分の宮に来られ、「洗濯する者の灰汁」のようにしてレビの子らを清められる、その清めを象徴している。この清めはアドベンチズムの初めに成し遂げられ、終わりにも再び成し遂げられる。

見よ、わたしは使者を遣わす。彼はわたしの前に道を整える。あなたがたが求める主が、突然その宮に来られる。あなたがたが喜ぶ契約の使者も。見よ、彼は来る、と万軍の主は言われる。しかし、彼の来る日をだれが耐えられようか。彼が現れるとき、だれが立ってられようか。彼は精錬する者の火のようであり、洗濯する者の灰汁のようである。彼は銀を精錬して清める者として座し、レビの子らを清め、彼らを金や銀のように精錬する。彼らが義にかなったささげ物を主にささげるためである。そのとき、ユダとエルサレムのささげ物は、昔の日々、いにしえの年のように、主に喜ばれるものとなる。マラキ 3:1-4.

イザヤはアハズに会う。その際、自分の息子をしるしとして伴い、その名は終わりの日に「残りの者が帰って来る」ことを象徴している。残りの者とは「帰って来る」者たちである。イザヤは神殿の清めの歴史のさなかに、邪悪な王アハズと会うが、その清めはミラー派の歴史において1844年に始まり、1863年の不従順によって幕を閉じた。終わりの時代における清めとは、十四万四千人の封印の歴史である。もしミラー派の人々が1844年に続いて与えられた神の開かれた摂理に従っていたなら、彼らはその働きを終えていただろう。

もしアドベンチストたちが、1844年の大失望の後も信仰を堅く保ち、神の開かれる摂理に一致して前進し、第三天使のメッセージを受け入れ、聖霊の力によってそれを世に宣べ伝えていたなら、彼らは神の救いを目の当たりにし、主は彼らの努力とともに力強く働かれ、働きは完成し、キリストはすでに、御自分の民をその報いにあずからせるためにお迎えに来られていたであろう。しかし、その失望に続く疑いと不確かさの時期に、多くの再臨信徒がその信仰を捨ててしまった……。このようにして働きは妨げられ、世界は暗闇の中に残された。もしアドベンチストの全体が神の戒めとイエスの信仰に団結していたなら、私たちの歴史はどれほど大きく違っていたことであろうか！ Evangelism, 695.

「神の開かれつつある摂理のうちに一致して前進する」ことに失敗したため、彼らは1856年までにラオデキヤ的状态に陥り、続く1863年の反逆は、古代イスラエルが第十にして最後の試練に失敗し、その後の四十年間荒野で死ぬよう宣告されたときに例証された、荒野でのさまよいの始まりとなった。

イザヤの子は、終わりの日の最後の神殿の清めにおいて「残りの者は帰って来る」という約束を示している。彼らの「帰還」は、もし彼が「帰る」なら神の見張り人となると約束されたエレミヤによって示されている。十四万四千人とは、失望から帰って来た者たちである。

十四万四千人である者たちは、失望を経験し、自分たちの主を待ち望んだ。彼らはミラー派の歴史における賢い乙女たちとして象徴されており、また、初めと終わりの歴史の双方において、真夜中の叫びの時、聖霊の注ぎの中で、二本の棒が結び合わされて一つの国となる。

邪悪な王アハズは、メッセージを聞いたもののイザヤによって示されたそのメッセージを拒むユダの指導層を表しており、その結果、彼らは「つまずき、倒れ、砕かれ、わなにかかり、捕えられる」。彼らは「口寄せをする者や、ささやき、つぶやく呪術師に伺い求める」者たちであり、それはテサロニケ人への第二の手紙にいう強い惑わしを受けの中で、彼らが屈してしまう心霊主義の体験を表している。紀元前742年にアハズがイザヤのメッセージを拒んだことは、ミラーのメッセージが拒まれた1863年と符合する。イザヤはミラーの型であり、イザヤとミラーの双方のメッセージは「七つの時」に基づいており、その基点はイザヤ書7章8節に見いだされる。

ミラーの子（イザヤの子）は、終わりの日に来るエリヤ運動を表している。

アハズの拒絶に対する宣告には、北の王によって征服されるという予言が含まれており、その北の王は終末において、教皇権に支配される現代ローマの三者連合である。

主はさらに私に語って言われた。「この民が、静かに流れるシロアハの水を退け、レツインとレマリヤの子を喜んだゆえに、今や、見よ、主は彼らの上に大河の水——勢い激しく水量の多い水、すなわちアッシリアの王とそのすべての栄光——を押し寄せさせる。それはそのすべての水路にあふれ、すべての岸を越えて行く。彼はユダを通り抜け、あふれ、押し寄せ、越えて行き、ついには首にまで達する。広げた翼は、あなたの地の広がりを満たすであろう。インマヌエルよ。」イザヤ書 8:5-8.

イザヤは上の池の水道の端で悪しき王アハズと会った。上の池がキリストの時代のシロアムの池と同一であったかどうかについては、聖書史家や考古学者の間に不確実性があるものの、イザヤの預言の文脈はあらゆる疑いを取り除く。というのも、イザヤは、アハズが静かに流れるシロアの水を退けたために、北の王が彼に襲いかかることになることと示しているからである。「シロア」は旧約聖書における、新約聖書の「シロアム」の名称である。

イエスが盲人を癒やされたのはシロアムの池であり、邪悪な王アハズは、1863年にも、また間もなく来る日曜法の時にも、癒やされることを拒む盲目のラオデキヤの指導部を表している。「シロア」と「シロアム」はどちらも「遣わされた」を意味し、父から子へとメッセージが遣わされ、子はそれをガブリエルと聖なる天使たちに託してイザヤに伝えさせ、イザヤは天から「遣わされた」そのメッセージを盲目のラオデキヤの指導者のもとへもたらした。

イザヤがメッセージを告げた上の池の水道は、聖霊の雨が神の民に運ばれる場所を象徴しており、これはゼカリヤの幻の金の管やヤコブの夢のはしごによっても示されている。

神が私たちのために備えてくださったものは、ゼカリヤ書3章と4章、特に4章12～14節に表されている。『私は重ねて答え、彼に言った。「この二つの金の管を通して自らのうちから金の油を注ぎ出しているあの二本のオリーブの枝は何ですか。」彼は私に答えて言った。「それが何であるかをあなたは知らないのか。」私は言った。「いいえ、主よ。」すると彼は言った。「これらは、全地の主のかたわらに立つ二人の油注がれた者である。」』

主はあらゆる備えに満ちておられる。主に手段の不足はない。私たちの信仰の欠如、地上的な心、軽薄な言葉、会話に現れる不信のために、暗い影が私たちを取り巻くのである。キリストは、全く麗しい方、万の中にひとときわ優れた方として、言葉や品性に現されていない。魂が虚栄に向かって自らを高ぶらせることに満足しているとき、主の御霊はそのためにほとんど何もしてやることができない。近視眼の私たちは影こそ見ても、その彼方の栄光を見ることができない。御使いたちは四方の風を押さえている。四方の風は、怒れる馬に警えられ、手綱を振り切って地の全面を駆けめぐろうとし、その跡に滅びと死をもたらそうとしている。

私たちは永遠の世界のまさに瀬戸際で眠っていてよいのだろうか。私たちは鈍く、冷たく、死んだようになっていてよいのだろうか。ああ、私たちの教会において、神の霊と息がその民に吹き込まれ、彼らが自分の足で立ち上がって生きることができますように。道は狭く、門は狭いのだということを私たちは見極める必要がある。しかし、狭き門を通り抜けると、その広がりには限りがない。『Manuscript Releases』第20巻、216、217頁。

「黄金の油」とは、上の池から、その導管、すなわち二つの黄金の管を通して下ってくる神の御霊からのメッセージのことであり、この二つの黄金の管とは、聖書と預言の霊、または旧約と新約、または律法と預言者、またはモーセとエリヤという二人の証人である。

全地の主のそばに立つ受膏者たちは、かつてサタンに与えられていた守りのケルブとしての地位を持っている。御座を取り巻く聖なる存在たちを通して、主は地に住む者たちと絶えず交信を保っておられる。黄金の油は、神が信者のともしびを満たし続け、揺らいで消え去ることのないようにされる、その恵みを表している。もし神の御霊の告げることばにおいてこの聖なる油が天から注がれなければ、悪の諸勢力が人を完全に支配してしまうだろう。

私たちが神から送られるみ告げを受け取らないとき、神は辱められる。こうして、暗闇の中にいる者たちに伝えられるために、神が私たちの魂に注ぎ込もうとしておられる黄金の油を、私たちは拒んでしまう。「見よ、花婿が来る。出て行って彼を迎えよ」という呼びかけが来るとき、聖なる油を受け取らず、心にキリストの恵みを大切にしていなかった者たちは、愚かな乙女たちのように、自分たちが主をお迎えする備えができていないことに気づくであろう。彼らには、その油を得る力が自分自身の内にないので、彼らの人生は難破してしまう。しかし、もし神の聖霊を求め、モーセがそうしたように「あなたの栄光を私に見せてください」と嘆願するなら、神の愛は私たちの心に豊かに注がれる。黄金の管を通して、黄金の油が私たちに注がれるであろう。「権勢によらず、力によらず、ただわが霊によって」と万軍の主は言われる。義の太陽の輝く光線を受けて、神の子どもたちは世にあって光として輝く。Review and Herald, 1897年7月20日。

アハズが拒んでいたメッセージは真夜中の叫びのメッセージであり、もしラオデキアの指導者たちが1856年に彼らに「送られた」ラオデキアへのメッセージを受け入れていたなら、それはキリストの再臨へと至っていただろう。そのメッセージはやがて大いなる叫びへと高まり、神の民は働きを終え、平安のうちにあったはずだ。ところが彼らは、救い出されたはずの吐いたものに戻ってしまった。

イザヤとアハズは、布さらしの野の清めの過程の中にある者として描かれており、この清めはマラキ書三章における契約の使者によって成し遂げられる。彼らは、ゼカリヤの幻において「油」（メッセージ）が注がれている場所に象徴的に位置づけられており、終わりの日には、イザヤがアハズに伝えるメッセージは第三の災いのイスラムのメッセージであり、七つの雷の隠された歴史のメッセージであり、「八番目は七に属する」というメッセージであり、ぶどう園のメッセージであり、「真理」のメッセージである。これらはすべてイエス・キリストの啓示の要素であって、終わりの日に布さらしの野で表される清めを生み出す。

それは、かつて今も、「七つの時」のメッセージでもある。ミラーの礎石から隅のかしら石へと変わっていくものであり、最初の真理であったがゆえに、最後の真理でもなければならぬからである。1863年は、1844年10月22日に第三の天使が到来したことからは始まり、1856年に「七つの時」の光へと最終的に至った浄化の過程の結末を示した。1844年には、二千三百年の光が、二千五百二十年によって示された結末へとつながる始まりを示した。しかし、始まりと終わりにおけるラオデキア的盲目は、この二つの幻の関係を見過ごし、見ようとしぬ。1863年は、メッセージの封印が解かれるときに常に起こる浄化の過程の結末を表しており、第三の天使のメッセージは1844年10月22日に封印が解かれた。

1844年に封印が解かれた第三天使の光は、単一の光ではなく、ホワイト姉妹が「第三天使の前進する光」と呼ぶものであった。第三天使の前進する光は1844年に始まり、恩恵期間が閉じるまで前進し続けるが、初めて到来した時と最終的に終わる時には、第三天使に特有の試験の期間がある。その初めと終わりの試験期間は、ダニエルが「知識が増すこと」として表している試験の過程をも表しており、それもまた第三天使の前進する光である。

当初の試練の過程は1844年に始まり、前進する光は知識を増し加えつつ1856年に終結に至った。試練の期間の始まりの光と終わりの光は、ダニエル書8章13節と14節の二つの幻であり、それはアドベンティズムの土台と中心の柱を表している。

第一の天使の試練の期間は1840年8月11日に始まり、1844年4月19日の第一の失望で終わった。次いで第二の天使の試練の期間が始まり、1844年10月22日まで続いた。その時点で第三の天使が現れ、第三の天使の試練の期間は、1863年にラオディキア的アドベンティズムが第三の天使の光を拒絶するまで続いた。

ミラー派アドベンティズムにおける第三天使の試みの期間には始まりと終わりがあり、その始まりと終わりは同じ事柄を表していなければならない。というのも、イエスは常に、物事の終わりをその始まりによって示すからである。第三天使の進展する光の始まりは、ダニエル書8章14節の「現れ」（“mareh”の幻）の光であった。第三天使の進展する光の終わりは、ダニエル書8章13節の「聖所と軍勢の踏みにじり」（“chazon”の幻）の光であった。この二つの幻は、預言的に相互に絡み合っている。

そのとき、あなたは第七の月の十日に、ヨベルの角笛を吹き鳴らさせよ。贖罪の日に、あなたがたの全土で角笛を吹き鳴らさせよ。レビ記 25:9

1844年10月22日の大贖罪日に吹き鳴らされるはずであったのはヨベルの角笛であり、それは神聖な七年の周期、すなわち合計二千五百二十日に当たるものを表している。主は古代イスラエルを直ちに約束の地に導こうとされたが、彼らの反逆のためそれは実現しなかった。主は現代のイスラエルも直ちに約束の地に導こうとされたが、反逆がそれを阻んだ。もし現代のイスラエルが第三天使のメッセージの前進する光に従順であったなら、彼らは世界を警告し、主は百年以上も前にお戻りになっていたであろう。

それが起こるためには、主はミラー派の間に変革を起こす必要があった。そしてその変革は、聖書において「神の奥義」と呼ばれている。もしアドベンチズムが第三の天使の進展する光に従っていたなら、ヨベルのラッパは終わりに至るまで鳴り響いていただろう。というのも、第七のラッパが鳴り響くその日々に、神の奥義が成就するからである。黙示録10章では、そのラッパ、すなわちヨベルのラッパであり、同時に第三の災いのラッパでもあるものが、1844年10月22日に吹き鳴らされ始めた。

私が海の上と地の上に立っているのを見たその御使いは、天に向かって手を上げ、世々限りなく生きておられる方、すなわち天とそこにあるもの、地とそこにあるもの、海とそこにあるものを創造された方にかけて誓って言った。「もはや時は延ばされない。しかし、第七の御使いの音がする日、彼が吹き鳴らし始めるときには、神の奥義は成就する。神がその僕である預言者たちに告げられたとおりにある。」ヨハネ

の黙示録 10:5-7.

1844年10月22日に始まった試練の浄化の過程は、第三天使の前進する光であり、ダニエル書8章14節の光から始まり、ダニエル書8章13節の光で終わった。それは14節の答えから始まり、13節の問いで終わった。

その十九年は、北と南の内戦のさなか、字義どおりのユダの王アハズに対してもたらされたイザヤの警告のメッセージの到来によって象徴されていた。

その十九年は、北の王がイスラエルを奴隷状態にすることで終わった。その十九年は、1844年における第三の天使の到来から、1863年の反逆に至るまでを象徴していた。

第三の天使の増し加わる光は、イザヤのメッセージによって表されていた。

その前進する光を拒んだことはミラー派運動に終止符を打ち、その試練の期間にフィラデルフィア時代のミラー派運動はラオデキヤの教会の段階へと移行した。紀元前742年に始まった19年間と、1844年に始まった19年間は、いずれも終わりの時における試練と精錬の過程、すなわち第三天使の前進する光の最終試練の期間を表している。

その最後の試練の過程で、神の奥義は成就する。十四万四千人とは、待ち、戻り、封印される者たちである。

この証言を巻きとじ、この教えを私の弟子たちの間で封じよ。私は、顔をヤコブの家から隠しておられる主を待ち望み、主を求める。見よ、主が私に与えられた子らと私は、イスラエルにおいて、シオンの山に住まわれる万軍の主からのしるしと不思議である。イザヤ書 8:16-18

終末の時代における第三の天使の前進する光の最終の試みの期間は、初めの試みの期間が始まったところから始まった。それは、イエスが御手を天に上げ、「もはや時はない」と宣言されたときに始まった。その宣言は、聖なる七の周期が完結し、第七のラッパがヨベルを告げた1844年10月22日に起こった。七年の周期を七度繰り返すと、文字どおり四十九年、すなわち二千五百二十日となる。

1989年は、十四万四千人の運動における「終わりの時」を画し、また、1863年の反乱から始まった126年間の終結点に当たる。十四万四千人の運動は、「終わりの時」に「七つの時」の象徴とともに始まった。というのも、126は1260の十分の一であり、1260はさらに2520の半分だからである。

イエスはいつも、物事の終わりを物事の始まりと結びつけて示し、十四万四千人の運動の始まりは、その終わりの場合と同じく、「七つの時」という象徴によって印づけられた。神の奥義が成就する時である第七の天使のラッパが鳴り響く日々は、黙示録十一章の「三日半」の日々が終わったところで始まった。第七のラッパ、すなわち第三のわざわいは、2023年10月7日に二度目の音を響かせ、神の奥義は今や、「彼がその僕である預言者たちに告げられたとおりに」成就に至りつつある。この運動の終わりも、まさに同じ運動の始まりと同様に、「七つの時」という象徴によって印づけられている。

1798年の「終わりの時」に、北王国に対する神の憤りの「七つの時」が終わり、ミラー派の運動の終わりには、「七つの時」に関連する真理の拒否が1863年の反逆のしるしと

なった。イエスは常に、ある事柄の終わりをその始まりによって示される。第一の天使の運動（ミラー派）は、第三の天使の運動（十四万四千）を例証している。どちらの運動も「七つの時」によって始まり、「七つの時」で終わる。こんな話は作りたくても作れない。

次の記事でこの研究を続けます。

責任ある立場にある者は、世の自己放縦でぜいたくな原則に染まってはならない。というのも、そのようなことをしている余裕はないからであり、たとえ余裕があったとしても、キリストに倣う原則がそれを許さないからである。さまざまな教えを与えなければならない。「主は誰に知識を教え、誰に教義を悟らせるのか。乳を離れ、乳房から引き離された者たちに、教訓に教訓を、教訓に教訓を、定めに定めを、定めに定めを。ここにも少し、あそこにも少し。」このようにして、神の言葉を信じる親は、主の言葉を子どもたちの前に忍耐強く差し出し、彼らの前に置き続けなければならない。「主はどもる唇と異なる言葉をもって、この民に語られる。主は彼らにこう言われた。これは、疲れた者を休ませる安息である。これは潤いである。だが彼らは聞こうとしなかった。しかし主の言葉は、彼らにとって、教訓に教訓を、教訓に教訓を、定めに定めを、定めに定めを。ここにも少し、あそこにも少し、となった。彼らが行って後ろに倒れ、砕かれ、わなにかかって捕らえられるためであった。」なぜか—それは、彼らに与えられた主の言葉に耳を傾けなかったからである。

これは、教えを受けることなく自分の知恵を尊び、自分の考えに従って自ら事を行うことを選んできた者たちを意味する。主は彼らに試みを与え、主の勧めに従う立場をとるのか、それともそれを拒んで自分の考えどおりに行うのかを明らかにされる。そして彼らが後者を選ぶなら、主は彼らをその必然の結果に任せる。私たちのあらゆる歩み、神へのすべての奉仕において、主は私たちに語られる。「わたしにあなたの心をささげよ」。神が求めておられるのは、従順で、教えを受け入れる心である。祈りを優れたものに行っているのは、それが愛に満ち、従順な心から息吹のように生み出されているという事実である。

神はご自分の民にいくつかのことを求めておられる。もし彼らが、「私はこのことを行うために心を明け渡すことはしない」と言うなら、主は天の知恵なしに、彼らが自分では賢明だと思い込んでいる判断に従って進んでいくのをお許しになり、この聖句 [イザヤ 28:13] が成就するまでそうさせておかれる。あなたがたは、「自分の判断と調和するある程度までは主の導きに従うが、その後は主の似姿に従って形づくられることを拒み、自分の考えに固執する」などと言ってはならない。問うべきは、「これは主のみこころか」であって、「これは——の意見や判断か」ではない。牧師たちへの証言、419。